

「これはわたしの体である」 (マルコ14:12～26)

挽地茂男

2019.6.16 日本基督教団・千歳丘教会

ペンテコステ礼拝の直前まで、マルコ13章の「小黙示録」を読んでおりました。「小黙示録」の結びの部分13章の33－37節はすでに(2018.11.18)読みましたし、14章1－11節の「ナルドの香油」の物語もすでに(2019.4.7)読んでおりますので、今週はいきなり「最後の晩餐」の物語ということになりました。最後の晩餐は聖餐式が制定された食事として重要な意味を持っていますが、元来はユダヤ教徒が過越祭の際に祝う、過越の食事です。それゆえ、過越の食事であったということが、聖餐式の意味にとっても大切なのです。

この過越祭と呼ばれるユダヤ教のお祭りは、ユダヤ人にとって大切な祭でありまして、現代でも大切に祝われております。その過越祭の晩餐会の式次第はその内容と順序が非常に細かく規定されているのですが、その中に過越祭の「物語」(ハガダー)というプログラ

ムがあります。そこに来ますと、晩餐会を主宰しておりますその家の家長が冒頭次のように宣言いたします。「**いつの世にあっても、人は自らをエジプトを脱出したもののように自分自身を見なさなければなら**

い」。つまり、ユダヤ教徒はこの過越の食事において、まず「**エジプトを脱出した者**」という言い方で、(1)自分自身の救いの根拠を確認しているのです。そしてさらにこの宣言は、その救いを与えてくださった(2)主への信頼と感謝と謙遜を保つように戒めているのです。この救いがなければ今ここに立っていることのできない存在であることを認めるように、間接



現代の過越の食卓

セダー(式次第)

(現代の過越祭)

種入れの食物を探す
ロウソクに火を灯す
四杯の杯
聖別の杯(一杯目)
手を洗う
パセリを浸す
マッツァーを割る
過越の祭りの物語(ハガダー)
過越の祭りの三つの要素
四つの質問
四つの質問に対する答
十の災い
ダイエヌ
讃美
裁きの杯(二杯目)
手を洗う
マッツァーを食べる
苦菜を食べる
苦菜とマッツァーを共に食べる
お祭りの食事
アフィコーメンを食べる
贖いの杯(三杯目)
エリヤの席
エリヤフ・ハナビ
讃美の杯(四杯目)
来年はエルサレムで

的に命じているのです。そしてこのようにして、過越祭を祝うことによって、(3)個人と共同体のアイデンティティが確認されていったのです。

宗教にとって儀礼というものは非常に大切なものですが、特に食物を用いる「食物儀礼」はどの宗教でも重要な意味を持っています。食物儀礼は二つの要素から成り立ちます。一つは「供犠」神様に向かって献げるあるいはお供えするという要素です。もう一つは「共餐」あるいは「共食」、つまりお供えをした物を、今度は、神様の側からいただいて、信徒の間で分かち合っていたいただくという要素です。いったん神様にお供えして聖別された「聖なる食物」を媒介として、神と人間との間にさらに人間同志の間に、いわば血の絆とも言うべき連帯性が生まれることを象徴的に意味するのです。そこには「同じ釜の飯を食った仲間」以上の連体性が生まれるのです。ラドクリフ＝ブラウン(A. R. Radcliffe-Brown)という人類学者が次のようなことを言っております。「宗教儀礼は集団成員の心の中に一定の感情体系を保たせる手

段であるから、儀礼がないとこれらの感情は存続させることは出来ないし、これらの感情がないと集団組織も存続することができない」(一部、訳語変更)。さてユダヤ人の民族的な連帯感がいっそう高まる、除酵祭から過越祭にかけてのことでした。12-16節。

14:12 除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。14:13 そこで、イエスは

次のように言
って、二人の
弟子を使い
に出された。「都
へ行きなさい。
すると、水が
めを運んでい



る男に出会う。その人について行きなさい。14:14 その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』14:15

すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準

備をしておきなさい。」14:16 弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。

過越祭は、ユダヤ教最大の祭です。除酵祭も含めて8日間続きます。これは出エジプトを記念する祭で、イスラエルの人々がエジプトでの奴隷状態から解放された紀元前1250年頃の出来事を記念しています。出エジプト記12章1－20節にこの過越祭の食事の規定が書かれています。過越祭はイスラエルの正月の祭、ユダヤの春の大祭で、敬虔なユダヤ人は大本山エルサレム神殿に参詣します。外地に住むユダヤ人も多くがこの祭のために長旅をしてエルサレム神殿にやってきます。ルカによる福音書には主イエスの家族が「ガリラヤ巡礼団」に加わってエルサレム神殿を訪れた時のことが書かれています(2:41-52)。これは日本でいう「講」や「講社」のようなもので、神仏を祀り、または参



詣するために組織する団体(巡礼団)です。関東の近場では、大山、高尾山に参る「講」。有名などころでは、伊勢神宮を参詣するための伊勢講、京都の伏見稻荷を代表とする稲荷神社に参詣する稲荷講、弘法大師(や伝教大師)のゆかりのある寺院や事蹟を巡る大師講などがあります。ルカ福音書2章42節には「慣習に従って」という表現で、ヨセフ・マリア・イエスの一家が神への敬虔の表現としてエルサレムに上る慣習(しきたり)を大切にしていたことが記されます。2章41－42節。

ルカ 2:41 さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。2:42 イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。

イスラエルの民が大切にしている過越祭の精神とは何でしょうか。それは出エジプトの出来事に見ることができます。つまり出エジプトとはまず、先ほど申しましたように、(1)エジプトの奴隷状態からの解放を意味します。つまり過越祭は、神の救いを再確認する機会となるのです。そしてイスラエルの民という集団が共有する

共通価値が確認されます。そうしますと結果として、この過越祭という(2)儀礼によって**集団的結束力**が高められていくことになるのです。イスラエルの民は、神の救いの共同体としての意識を強めていくのです。教会(ἐκκλησία)とは「呼び出された者の集まり」という意味ですが、同様に聖餐式は、主イエスの十字架の出来事によって、罪の縄目から解放され、救いの共同体としての意識を強めるのです。



もう少し過越祭についてみておきましょう。過越祭の中心となるのはやはり過越の食事です。その過越の食事の規定を記した出エジプト記12章1-14節を見ておきましょう。

12:1 エジプトの国で、主はモーセとアロンに言われた。12:2 「この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい。12:3 イスラエルの共同体全体に次のように告げなさい。『今月の十日、人はそれぞれ父の家ごとに、すなわち家族ごとに小羊を一匹用意しなければならない。12:4 もし、家

族が少人数で小羊一匹を食べきれない場合には、隣の家



スルバラン「神の小羊」

族と共に、人数に見合うものを用意し、めいめいの食べる量に見合う小羊を選ばねばならない。12:5 その小羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。用意するのは羊でも山羊でもよい。12:6 それは、この月の十四日まで取り分けておき、イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れにそれを屠り、12:7 その血を取って、小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。12:8

そしてその夜、肉を火で焼いて食べる。また、酵母を入れないパンを苦菜を添



©2010MMBOX PRODUCTION

えて食べる。12:9 肉は生で食べたり、煮て食べてはならない。必ず、頭も四肢も内臓も切り離さずに火で焼かねばならない。12:10 それを翌朝まで残しておいてはならない。翌朝まで残った場合には、焼却する。12:11 それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖



Dieric Bouts, "Feast of Passover" 1464-67

を手にし、急いで食べる。これが主の過越である。12:12 その夜、わたしはエジプトの国を巡り、人であれ、

家畜であれ、エジプトの国のすべての初子を撃つ。また、エジプト／＼のすべての神々に裁きを行う。わたしは主である。12:13 あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなたたちに及ばない。12:14 この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない。

過越の食事のイメージを整理しておきましょう。まず(1)繰り返しますが、奴隷の状態からの解放、つまり救いのイメージです。そこには(2)救いにとって決定的となる小羊と小羊の血のイメージが出てきます。このイメージが新約聖書では、イエスの十字架上の血の

イメージに重なります。そして(3)苦難のイメージです。先ほど読みました12章8節には「苦菜」が出てきます。過越の食事では、イスラエルの民が経験した苦難を想起するために、「苦菜」を食事の一部として食べます。そして過越には(4)出発のイメージが明確に出てきます。奴隷の状態から自由へ、苦難から解放への「旅立ち」のイメージです。また12章11節にはこう書かれます。

食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。服装も整えてしかも杖までもって、つまり旅支度をして、しかも奴隷と苦難の土地を逃れる者のように「急いで食べる」のです。

このような過越の食事を主イエスと弟子たちはしようとしていたのです。その準備に先立って弟子たちはこう質問します。12節b。「**過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか。**」これを受けて主イエスは、2人の弟子たちに指示を与えて派遣します。13節。「**都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に会おう**〔当時、水瓶を運ぶのはふつう女性の仕事でしたから、それ

が分別特徴となります]。その人について行きなさい。」そして14節「その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』」主イエスとこの主人とは既知の間柄で、以前に「今度の過越にエルサレムに行くから、どうぞよろしく」とすでに依頼がなされていた、などと色々な説明がされますが、想像の域を出ません。みなさんは、この場面を読みながら、どこかで似たような記事をお読みになったと感じておられませんか。あのエルサレム入城の際の「ロバの調達」の記事です。11章1－7節。

11:1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベツファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、11:2 言われた。「向



こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。11:3 もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」11:4 二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。11:5 すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。11:6 二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。11:7 二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。この二つの出来事に共通する要素は2つ。1つはどちらも①主イエスの先見性を表現しており、2つ目はどちらにも②「主の御業がなされるときには備えがある」というメッセージを伝えていることです。教会が主の導きに従って主の御業をなそうとするときには、必ず備えがある、主はそれをご存じなのです。必要なものは必ず与え

られる、ということなのです。

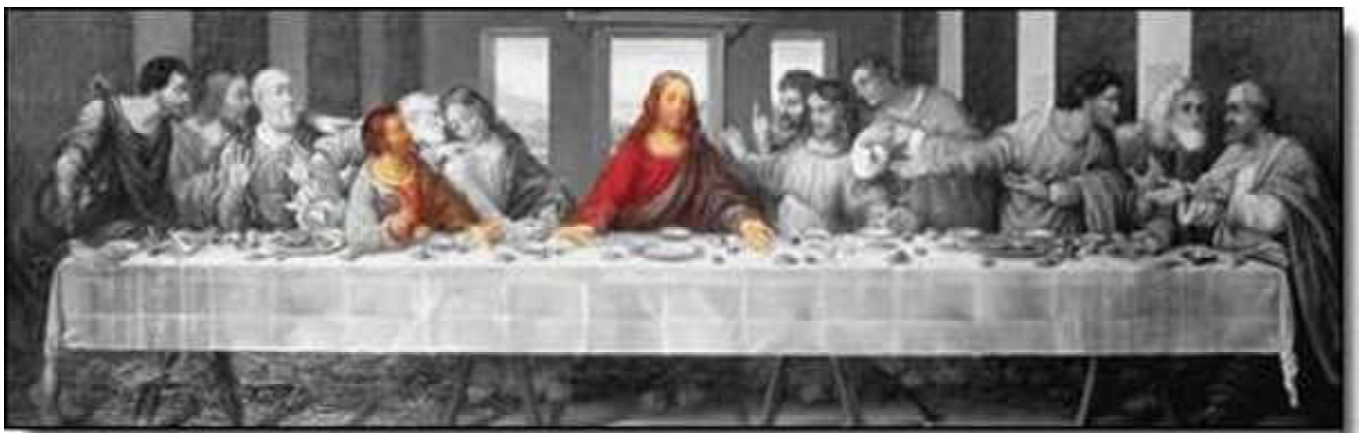
過越の食事をする部屋に話をしましょう。15節。「すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」このような指示に従って「弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだった」のです(v.16a)。こうして弟子たちは、主イエスが言われたとおり「過越の食事を準備します」(v.16b)。事前に備えられた口バ、事前に整えられた部屋。「主の御業に備えあり」なのです。教会の活動や行事の計画を立てる時に、いつも経験します。御心を確信すると、同時に必要なものが与えられるという信仰が与えられます。おまけに何か支障になることが生じたり、妨害が入るとますます御心を確信します。

主のために部屋は整えられていました。この部屋で過越の食事が祝われるのです。今一度、過越の食事を取り巻いているイメージを整理しておきましょう。出エジプトを背景にしたその食事には、まず第1に、①救いのイメージです。そして第2に、②救いをもたらす小羊のイメージ、そして第3に③苦難のイメージです。これはキリストの苦難とも重なります。そして第4に、④新しい出発のイメージです。

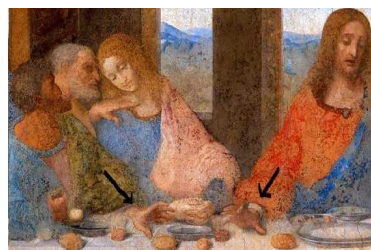
さて夕方になって、主イエスの十二弟子の一行は食事の席に着きます。17節。

14:17 夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。

主イエスが「十二人と一緒にそこへ行かれた」(v.17)とされていますが、準備のために先行した2人の弟子はまだ町にいるはずだか



ら、「十人」ではないのか、とも考えられますが、あるいは、彼らはすでに町から主イエスの許に戻



って、あらためてイエスに同行して食事の席に着いた

とも考えられます。どちらなのかは分かりませんが、いずれにしろ、

「十二人」という表現は——別の表現も取りながら——強調的に反復されています。つまり十二人とは主イエスと最も親しい関係にある弟子集団のことです。その最も親しい弟子集団の中から裏切り、離反が生じると主イエスは語り出すのです。18節。「一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者」が主イエスを裏切ろうとし



ている、と言われます。この少し先の20節では、「十二人のうちの一人で」と「十二」を繰り返し、さらに「わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ」と親密な弟子集団の中から裏切り、離反が生じることを強調するのです。

食事は関係の親密さを表わすのに、特別な意味を持っている場合があります。日本語でも「同じ釜の飯を食った仲間」という表現は、関係の親密さを表す表現の1つです。わたしの恩師が東京外語大学の学生だった頃、中近東から2人留学生が来ていて、日本人学生とも仲良くしていたそうです。しかし普段はとても仲良くしているのですが、昼食時になると2人していなくなってしまうのだそうです。ユダヤ教かイスラームか何の宗教かは分からないのですが、彼らには異教徒とは一緒に食事ができない、という戒律があったそうです。「今時」と思うかも知れませんが、今でも異教徒との過度の接触や交流——食事がそうだというのは信じがたいですが——を禁じる宗教は存在します。こういう慣習は初期のキリスト教の一部に

もありましたし(Cf. ガラテヤ書)、ユダヤ教の中にもありました。例えば、死海のほとりにあったクムラン教団の入団規定では、入団するまでの最初の1年は試験期間で共同体のメンバーとは認められません。しかし1年の試験期間が終わると洗淨式〔洗礼式の元型と言われています〕を受けてさらに2年を非正規のメンバーとして過ごします。そしてこの2年が終わると初めて、共同体のメンバーと同じ食卓に着くことができるのです。実に共同の食卓、共食に与るまでに3年の修養期間を要するのです。逆に考えれば、食事を共にするとはそれほどの親密さを表わすことでもあるのです。ユダによる裏切りを「食卓の共が裏切った」と表現するのは、食卓を一緒にするような親密な関係の者が裏切った、あり得ないことが起ったということ表現しているのです。



クムラン教団・遺跡

主イエスは、自分(人の子)の運命を左右する者——祭司長や律法学者への「引き渡し」に参加する者——が至近距離で同席していることを明らかにします。「**あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている**」(v.18)。主イエスは大変なことを口にしてしているのです。当然、弟子たちのうちに動揺がはしります。19節。

「**弟子たちは心を痛めて、『まさかわたしのことでは』と代わる代わる言い始めた**」。それでも主イエスは、さらにたたみかけるように、「**十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ**」(v.20)と加えます。しかし主イエスは、その裏切る者の卑劣な行為によって、聖書が成就する、と語ります。「**人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった**」(ὅτι ὁ μὲν υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ὑπάγει καθὼς γέγραπται περὶ αὐτοῦ, οὐαὶ δὲ τῷ ἀνθρώπῳ ἐκείνῳ δι' οὗ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδίδοται· καλὸν αὐτῷ εἰ οὐκ ἐγεννήθη ὁ ἄνθρωπος

ἐκεῖνος.)」。裏切る者の主体的な裏切り行為と、聖書の言葉の成就が同時に起こると語ります。新共同訳はすんなりと訳しすぎているので、裏切りと聖書の成就の関係が見づらくなっています。21節を、義智故知亡くなりますが、直訳をしておきます。「人の子は彼について聖書の書かれているとおり去って行く。しかしその人は不幸だ。なぜなら人の子は彼によって引き渡されるからだ。その人が生まれなかったのなら、その方が彼にとって良かったのだ。」裏切る者の主体的な裏切りの行為は、その結果聖書が成就したとしても、その卑劣な罪が割引されるものではありません。「人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった」という呪いにも似た言葉が彼に投げかけられるのはそのためなのです。しかし、その卑劣漢を裁くことはわたしたちの仕事ではありません。わたしたちが、心にすべきことは、人間の歴史には、人間の行う卑劣な行為を通してさえ、神の御心が成就していくという一面があるということなのです。直接的な事態を超えた、より大きな神

の御心のうねりがあるということなのです。

主イエスは、自分が裏切る者がいる席で、聖餐を制定されます。何故でしょうか。裏切る者も聖餐への招きから除外されていないのです。〔ヨハネ福音書は最後の晩餐の場面から、裏切るユダをさらせている。しかしヨハネ福音書では最後の晩餐で聖餐の制定はなされない。〕聖餐は主イエスの救いを確信する者にとっては意味ある物となるのです。裏切り者にすべての救いの窓口が閉ざされたのではないのです。聖餐は外に向かって開かれています。しかし聖餐は十字架を通して接近する以外に、意味あるものとならないのです。今読みました17－21節は弟子の裏切りを預言しました。そして27－31節は、弟子たちの全員が主イエスを知らないと否認し、主イエスを捨てて逃げてしまうこ



聖餐制定

とが預言されます。「裏切りの預言」と「否認の預言に」は含まれた22-26節の置かれているのが、聖餐制定の記事なのです。聖餐の制定の中心に主イエスの死が置かれるのは、もはや明らかです。

主イエスはパンをとって、そのパンに特別な意味を込めて語り出します。22-26節。

14:22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」

14:23 また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。

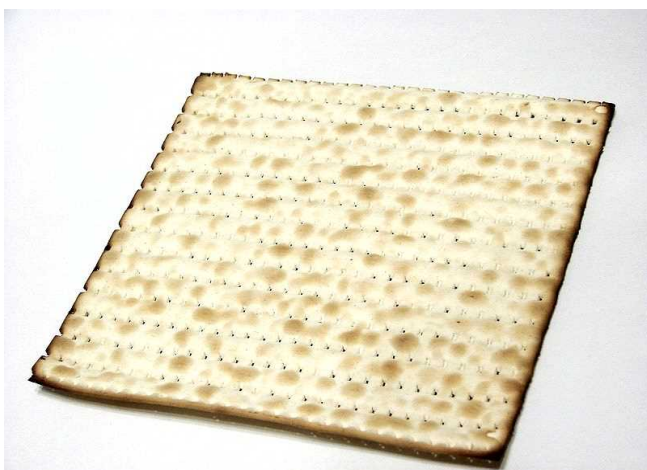
14:24 そして、イエスは言われた。

「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。

14:25 はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶど

うの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」14:26 一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

パンと杯は、救いのために献げられる主イエスの体と流された血を象徴すると同時に、過越祭で屠られ食される小羊の肉と血にイメージと重なります。救いは犠牲なくしては成就しなかったのです。聖餐式は、そのことを忘れずに、いつも心に刻みつけているための儀式(儀礼・聖礼典)なのです。ルカによる福音書は、はっきりとそのことを述べています。22章19節。主イエスは「**わたしの記念としてこのように行いなさい**」と語ります。[22:19 **τοῦτο ποιεῖτε εἰς τὴν ἐμὴν ἀνάμνησιν**. Cf. 1 コリ 11:24]。記念という言葉は〈アナムネーシス〉、思い起こすこと(想起)を意味する言葉です。つまり主イエスの死を思い起こすのです。その死が**徹底して死が語られる生涯とは、その逆に、徹底してその人が生きていたことの大切さが意識されている生涯のことです**。「わたしを思い起こすためにこのことを行いなさい」(ルカの言葉の直訳です)。思い起こすの



は、想起するのは、その死を語るの、その生が尊いからであり、いとおしいからであり、大切だからであり、かけがいのないものだからです。だからこそ繰り返し語られるのです。繰り返し聖餐式として祝われるのです。徹底して死を語ることは、徹底してその生を語ることだからです。その生涯が人間として生きられたことの重要性を確認することになるのです。そしてそれを確認することによって「**出会い**」が生じるのです。松永希久夫という新約学者がこのようなことを行っています(『歴史の中のイエス像』229頁)

「福音書伝承も、福音書も、初代教会の生活・活動の中から出てきました。教会の“生活の座”すなわち、礼拝がその中心にあるのですが、そこで繰り返されている過去の人ナザレ人イエスの記憶の**想起**(アナムネーシス)と、想起という形での現在の人主イエス・キ

リストとの出会いの内から伝承も福音書も産まれてきたのであり、また、そうした伝承――のちには福音書――を媒介に“記憶の想起”と“想起という形での出会い”が成立してきたのであります。福音書という文学類型の性質はそこに求められるのです。」礼拝では、聖餐式でも、福音書(聖書)が読まれまた説教されます。そのことによって、過去の主イエスの生前の出来事が想起されます(思い起こさせられます)。想起される(思い起こされる)ことによって、礼拝者にとって主イエスが現在の人として再び立ち現れるのです。福音書のもつ書物としての特長と力とは、その出会いを再生産し続ける所にあるのです。

聖餐は、わたしたちの生きる現在に、主イエスの最後の晩餐とさらには過越とを結びつけると同時に、25節で主イエスが「14:25 はっきり言っておく。神の国で新



たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい」と語った未来の神の国での祝宴とを結びつけるのです。過去と現在と未来とが三重に重なり合って、今を意味づけているのです。過去と現在と未来を重ねつつ、与えられた「今」を生きる者として、新しい一週間に歩み出してまいりましょう。

（祈り）慈愛の神よ、私たちがイエス・キリストの生涯を通して示されるあなたの恵みを感謝します。思い起こすたびごとに、心暖められ、新しい出発を決意することができると感謝します。

2019.6.16 日本基督教団・千歳丘教会



14:12 除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。

14:13 そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。

14:14 その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』

14:15 すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」

14:16 弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。

14:17 夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。

14:18 一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。

「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたし

を裏切ろうとしている。」

14:19 弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。

14:20 イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。

14:21 人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

14:22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」

14:23 また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。

14:24 そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。

14:25 はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

14:26 一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

14·12 Καὶ τῇ πρώτῃ ἡμέρᾳ τῶν ἀζύμων, ὅτε τὸ πάσχα ἔθουν, λέγουσιν αὐτῷ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ, Ποῦ θέλεις ἀπελθόντες ἐτοιμάσωμεν ἵνα φάγης τὸ πάσχα;

14·13 καὶ ἀποστέλλει δύο τῶν μαθητῶν αὐτοῦ καὶ λέγει αὐτοῖς, Ὑπάγετε εἰς τὴν πόλιν, καὶ ἀπαντήσῃ ὑμῖν ἄνθρωπος κεράμιον ὕδατος βαστάζων· ἀκολουθήσατε αὐτῷ

14·14 καὶ ὅπου ἐὰν εἰσέλθῃ εἴπατε τῷ οἰκοδεσπότῃ ὅτι Ὁ διδάσκαλος λέγει, Ποῦ ἐστὶν τὸ κατάλυμά μου ὅπου τὸ πάσχα μετὰ τῶν μαθητῶν μου φάγω;

14·15 καὶ αὐτὸς ὑμῖν δείξει ἀνάγαιον μέγα ἐστρωμένον ἑτοιμον· καὶ ἐκεῖ ἐτοιμάσατε ἡμῖν.

14·16 καὶ ἐξῆλθον οἱ μαθηταὶ καὶ ἦλθον εἰς τὴν πόλιν καὶ εὑρον καθὼς εἰαυτοῖς καὶ ἡτοίμασαν τὸ πάσχα.

14·17 Καὶ ὁψίας γενομένης ἔρχεται μετὰ τῶν δώδεκα.

14·18 καὶ ἀνακειμένων αὐτῶν καὶ ἐσθιόντων ὁ Ἰησοῦς εἰ, Ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι εἷς ἐξ ὑμῶν παραδώσει με ὁ ἐσθίων μετ' ἐμοῦ.

14·19 ἤρξαντο λυπεῖσθαι καὶ λέγειν αὐτῷ εἷς κατὰ εἷς, Μήτι ἐγώ;

14·20 ὁ δὲ εἶπεν αὐτοῖς, Εἷς τῶν δώδεκα, ὁ ἐμβαπτόμενος μετ' ἐμοῦ εἰς τὸ τρύβλιον.

14·21 ὅτι ὁ μὲν υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ὑπάγει καθὼς γέγραπται περὶ αὐτοῦ, οὐαὶ δὲ τῷ ἀνθρώπῳ ἐκείνῳ δι' οὗ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδίδοται· καλὸν αὐτῷ εἰ οὐκ ἐγεννήθη ὁ ἄνθρωπος ἐκεῖνος.

14·22 Καὶ ἐσθιόντων αὐτῶν λαβὼν ἄρτον εὐλογήσας ἔκλασεν καὶ ἔδωκεν αὐτοῖς καὶ εἶπεν, Λάβετε, τοῦτό ἐστιν τὸ σῶμά μου.

14·23 καὶ λαβὼν ποτήριον εὐχαριστήσας ἔδωκεν αὐτοῖς, καὶ ἔπιον ἐξ αὐτοῦ πάντες.

14·24 καὶ εἰαυτοῖς, Τοῦτό ἐστιν τὸ αἷμά μου τῆς διαθήκης τὸ ἐκχυννόμενον ὑπὲρ πολλῶν.

14·25 ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι οὐκέτι οὐ μὴ πῖω ἐκ τοῦ γενήματος τῆς ἀμπέλου ἕως τῆς ἡμέρας ἐκείνης ὅταν αὐτὸ πίνω καινὸν ἐν τῇ βασιλείᾳ τοῦ θεοῦ.

14·26 Καὶ ὑμνήσαντες ἐξῆλθον εἰς τὸ ὄρος τῶν Ἐλαιῶν.